甲子園にかけた夏

佐々木監督のアドバイスと自分を信じてスランプから脱

出した銀次君。夏の雪辱を胸に臨んだ昨秋の東北大会では８強に進出。銀次君のスピード感あふれるプレーはひときわ目を引いた。大会打率６割６分６厘と大活躍。まさに打線の軸だった。

平成17年７月15日、ついに夏の大会が始まった。一枚しかない甲子園への切符をつかむために、県内の85校が熱戦を繰り広げた。

盛岡中央高校は強豪を破り、決勝へ進出。対戦相手は連日逆転劇を続け勝利してきた花巻東校。

中央の応援席は、同校の生徒やチームメート、野球部ＯＢなどで埋め尽くされた。その中には、メガホンを持って懸命に応援する、保男さんと恵美子さん、母・一枝さん（37）の姿もあった。

１塁側スタンドで赤いメガホンを持って懸命に応援する祖母の恵美子さん

緊迫した試合が続き、８回表を終わって２対１で中央高がリード。しかし、その裏３点を奪われ逆転。甲子園にかけた夏は終わった。

夢をかなえるため

小学２年生で野球を始めた。中学生からポジションは捕手。素振りや捕手の捕球練習のため、保男さんが庭にネットを張った練習場を作ってくれた。みんなに支えられ、応援され、ときには挫折もあったが、それを乗り越えてきた。

甲子園出場はかなわなかったが、その後も、「プロになる」という夢をかなえるために、彼は野球を続けた。

そして10月３日、東北楽天ゴールデンイーグルスから３巡目で指名を受けた。彼は今、野球少年の夢と村民の期待を背に、プロの世界に挑戦する。

そんな彼に保男さんと恵美子さんは「苦しかったときをよきバネにして結果を出し、はい上がってほしい」と、いつも遠くから見守り続けた一枝さんは「入ったからには一軍で活躍してほしい」と願っている。

いろんな人の「思い」を背負ってプロにいってほしい

盛岡中央高野球部

佐々木大介（だいすけ）監督（31歳）

振り返ると、とにかく銀次は「３年間みせてくれたな」という印象です。試合に出ればヒットを打っているのが、わたしにとっては当たり前のようでした。「銀次は何がすごいか」とよく聞かれますが、一言で言えば「ボールとのコンタクトが１球目からとれるバッター」。

普通のバッターは相手ピッチャーを２、３球見ないと判断できないものですが、銀次の場合はボールを捕らえるセンスがずば抜けています。

銀次は１年生の春から起用し、３年間一緒でした。今思えば、３年間メンバー表に「宇部銀次」とい名前を誰よりも書いていました。新チームになって、メンバー表を書くとき、銀次という字を書けなくなって、はじめてダイヤモンドの中に宇部銀次という選手がいなくなったんだなぁと実感しました。

夏の大会の決勝戦でヒットを放ち塁上で笑顔を見せる銀次君

銀次が普代を出てくるとき、「普代の銀次としてプレーしないと駄目だ」とアドバイスしたことがあります。銀次自身も自分が育った普代を忘れたことはないと思います。常にみんなに支えられてきた銀次には、「感謝する気持ちを忘れない」ということを言い続けました。

今後は、高校の夏の大会以上の体でプロにいくことが必要だと思います。だから、この冬場のトレーニングは重要になってきます。銀次には普代の方とか、盛岡の方など、いろんな人の思いを背負って、仙台に行ってほしいです。その中でなんとか結果を出せるよう頑張ってほしいと願っています。